

ばならぬ。さいわい先生の御同情を蒙つたものか、江戸時代の文学者の中には商人が多く、秋成を筆頭に京伝・馬琴等の名を繰返されて、どんな境遇にあつても学問し研鑽しとけることが大切だといわれたことはたびたびであつた。子供も出来て白髪もふえた。幾才になつても学生時代に受けた先生の御教訓が、事あるたびに思い出されては、今さらのように胸をうつ。先生にはもつと延寿していただいで、叱つて、もらいたかつた。私はこれから先いゝるんな失敗をすることだろうが、先生に叱られるべき事がたくさん残つてしまつたように思うのだ。(昭和二十五年三月、自家営業)

後藤先生の思い出

森 本 修

後藤先生は、昭和二十九年七月に本学から大阪学芸大学へ御赴任になつた後も、引續いて非常勤講師として学部、大学院へ御出講いだいでいたことや、お宅が近い関係もあつて研究室へお出でになることが多かつた。先生の出講日は、いつか金曜日と定まつてい

た。そして、毎週金曜日講義を済まされた後、研究室に寄られて新着の雑誌類に目を通され、しばらく雑談をしてお帰りになつた。几帳面な先生は、出講日以外に研究室へお出でになる時には、事前に必ず私の在室時間や都合を尋ねてからお見えになつたものである。日本古典文学大系の仕事にかられるようになつてからは、そうしたことが数多くなつた。鞆の中から厚い草稿の綴りを取り出されて、必要な本に目を通されては「これはよし」とか「よし」とか、低いが力強く独言されて書き込みをされていた姿が目の方に浮ぶようである。そして、仕事を済まされると例の如く雑談をされた。雑談の内容も、私が近代文学を専攻している関係からか、先生は近代文学に関することを多く話題にされた。また、先生が大阪学芸大学へ御赴任になつて創刊された「学大國文」が刊行される度に、わざわざ足をはこんでこられて、一冊ずつ特徴のある先生の字で「謹呈」とか「××様」とか書かれたのを頂戴したものである。昨年十一月初旬、「今から研究室へ行く」という電話があつて、先生が研究室からお持ち帰りになつていた図書をかなり多く返却に

こられたことがあつた。その大部分は、古典文学大系「椿説弓張月」の執筆に必要あつてお持ち帰りになつたものであつたが、中には先生が本学に在職中に借り出されたものもあつた。その時は別段なんとも思わなかつたが、先生がお亡くなりになつた後、先生が余所から借り出されていた本について土岐さんと調べてみたところ、先生が研究室から借り出されていた図書はこの時全部返却されていたのである。

先生が研究室へ最後にお出でになつたのは、四月十九日であつた。その日、大学院の講義をお済ませになつた先生は、研究室で雑誌に目を通された後、皇学館への通勤の話や芝居の話など、いつになく話し込んで帰られた。次の週、二十六日は大学院の講義は御病気のため休みであつた。五月三日(金曜日)は祝日で休みなので、十日にはお目にかれるかと思つていた矢先、五月二日朝、出勤した私は先生急逝の報に接した。

十余年の間、学生として、また助手としていろいろ御指導いただいた先生についての思い出は尽きない。今は研究室におけるありし日の先生を偲び、御冥福をお祈りする次第で

ある。(本学助手)

後藤先生をしのんで

山川 一安

我々の恩師、後藤丹治先生が急逝された。

この道一筋に、一生を日本文学の研究と教授に捧げられた先生は、もはや再びその温顔を私達の前に現わされることはないのである。

まことに、痛惜のきわみである。

先生の学者としての偉大な業績については多くの人の知るところであり、私などが今更ここに蛇足を加えるまでもない。また、我々の母校立命館の日本文学科において、多くの後進を育て、幾多の人材を世に送られた功績も、永くわが文学部の歴史にとどまるであらう。

私は、昭和二五年から二九年まで、先生のお教えを受けた、そうして先生の学究としての一面にふれると同時に、先生の人間としての面に親しく接する機会を得たことを心から喜びとしている。先生は優れた学者であられると同時に、立派な人格者でもあられた。かざり気のない、朴訥な人柄、淡淡たる口調、

齋六十をすぎてなお失なわれぬ、あの懐しい童顔、そうして我々に接して指導される際には、吾子に教えるように懇切に教えられた。御指導についてはまことに丁寧かつ徹底的で、決してうむことがなかつたのである。

私は大学の卒業論文、大学院の修士論文ともに先生の御指導を受けたが、修士論文についていえば、私は幾度となく先生のお宅へ原稿を持参してお教えを乞い、その都度問題点や疑問点につき先生から御指摘や御指示を受け、帰宅してはそれらの点を検討して書きあらため、又御指導を仰ぎに参上した。その度に先生のお宅で御指導を受けることが深夜に及んだ。それでも、先生は終始温顔に笑みを浮かべ、深更に及んでもなお、興益々到るといったげな表情で、私に指導を与えられた。

そうして、私が辞去しようとする、更にいろいろと念を押されたものであつた。私は八年を経た今、なお昨日の事のように想起するのである。

しかしながら、人の運命ははかりがたいもので、私は種々の事情により、法律の独学をはじめたようになり、遂に畑違いの検事となつてしまった。まことに不肖の教え子であ

る。それでも、時々先生にお目にかかる機会があつたが、先生は畑違いの分野へ去つた私を学生時代とすこしも変らぬ態度で接して下さつたのであつた。

個人的な事を書き連ねて申訳もないが、先生の生前の面影を語りたい余り、ここに記したのである。先生は、教室で、研究室で、教え子達それぞれに、常に誠意をもつて指導、教授に当られた。教え子の多くは、私と同様の感慨や追慕の情をお持ちであらう。

その先生は、突然世を去られた。感慨は限りなく、痛惜の情、まことにたえがたい。しかしながら、先生の不朽の業績は学界に永く生命をとどめ、生前の面影は、我々教え子の心に生きているのである。

ここに、先生のありし日をしのび、謹んで追悼の一文を捧げる次第である。(昭和二九年六月大学院卒、現職、天津地方検察庁検事)